地理的なこころ

音田浩明

私は二部の昭和54年入学でしたが、仕事の都合で１年間休学し、実質的には昭和55年４月から昭和61年３月までの６年間大学にお世話になりました。昼は南税務署で働き夜は市大へという日々でした。仕事が一番忙しくなる確定申告の時期は大学は春休みということで、仕事と大学の両立という点では恵まれた環境だったと思います。何とか頑張って卒業はできましたが、今振り返ってみるともっと頑張れたはずではないか、十分な研究もできないまま中途半端な状態で終わってしまったのではないかという思いを強く感じています。

在学中の思い出として印象深いのは、北海道へ行った巡検です。とにかく雄大な景観に驚きました。広々とした大地、豊かに残る原生林、どこまでも続く直線道路など・・・。また、今は亡き青函連絡船に乗れたこと、帰りの特急はくちょうの車窓の景色は印象的でした。東北、北陸の農村地帯を進んでいくうちに、稲刈りの終わった農村の景観が地域によって実に多様な姿をしていることに驚きました。

また、高知県大豊町に行った演習は貴重な経験だったと思います。山の上の方まで続く棚田、その中に点在する民家、現地の人から直接話を聞かせていただいて分かったこと等この経験によって、地理学にとってフィールドワークがいかに大切かということを実感しました。

そして忘れてならないのは、服部昌之先生のことです。鳥取県東郷町出身の私は、鳥取大学で地理学の学会があったとき服部先生に同行させていただきました。東郷町は、「東郷荘和与中分絵図」の舞台で、条里制の痕跡も残っている土地ですから、服部先生には興味深い土地だったのだと思います。東郷町役場へ行かれて資料収集されるのにも同行させていただきました。この時の経験が、私の故郷に対する愛着心と故郷のことをもっとよく知りたい、研究してみたいという気持ちを呼び起こしてくれたように思います。しかしながら、何一つ恩返しができないうちに服部先生がお亡くなりになったことが残念であり、また申し訳なく思います。

大学卒業後も引き続き税務署に勤務する私は、南税務署から、三木、堺、大阪国税局、東大阪、富田林、芦屋と転勤していきました。地理学の研究とは何の関わりもない生活を送ってきましたが、各地にはそれぞれ特徴的な地場産業があり、その地場産業の動向が、税収という形で反映されてきますので、地場産業には関心を持ってきました。三木の金物や酒米、東大阪の町工場、河内長野の爪楊枝、灘の清酒。円高や海外との競争、バブル経済とその崩壊、消費構造の変化など時代の流れに翻弄されて変化しながらも力強く生き残っていく地場産業の姿を目の当たりにしてきました。

私は、大学在学中からマラソンと山登りが趣味でしたが、それは今もずっと続いています。北アルプス、南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳など数多くの山に登ってきました。山に登る際には地図を読むことが欠かせませんから、大学で学んだことが大いに役立っていると思います。まだ3000m級の

山でも北アルプスと南アルプスとでは景観が著しく異なっています。北アルプスはカール地形など雪や雨などによる浸食によって、特徴的な山容をした山が多く、森林限界が低いところにあって、岩や石などが剥き出しになったところが多いのに対し、南アルプスは高いところまで森林に覆われていて、一つ一つの山がでかくてどっしりとしている印象を受けます。私の大好きな山岳景観は次のとおりです。

奥穂高岳から見た槍ヶ岳・双六岳から見た槍ヶ岳

仙人池から見た剣岳・間ノ岳から見た北岳

ほかにもきりがないくらいあるのですが、このくらいにしておきます。

最近の山登りについて気づいたことを少し紹介しておきます。ひとつはなんといっても中高年の登山者が多いことです。そしてその人たちの多くが日本百名山を目指していることです。もうひとつ面白いのは、これは山登りのスタイルが変わってきていることの表れかもしれないのですが、南アルプスにも関西の人が多数行くようになったことです。以前は山登りに行くときは、夜行列車で行く場合が多く、乗換えが不便で交通の便の悪い南アルプスには関西からは行きにくいというイメージが強かったのですが、高速道路や林道などの整備が進んで、自動車で行く人が多くなった現在では、南アルプスは気軽に行けるところに変わったのかもしれません。

マラソンはこれまでにフルマラソン33回、100kmマラソン12回、130kmマラソン３回等走りました。海外はホノルルの１回だけですが、国内は、北海道から四国、九州まで各地に行きました。マラソンの場合にもコースの状況を理解する上で地図を読むことが大いに役立ちます。何キロ付近に上り坂があるとか、何々が見えてきたら何キロだから頑張りどころだとか、そういった情報をつかんでおくと心強いものです。

私のマラソンは一流選手のような勝つ為のものではなく、自分の為に楽しんでいるだけですから、目に映る景観を楽しんで走ることを心がけています。マラソンは地方で開催されることが多く、とりわけ100kmなどのウルトラマラソンは交通量の少ない道路を長い距離使うのでかなりの田舎で行われる場合が多いようです。それはまた景観の美しいコースが多いということでもあります。私が一番好きなサロマ湖100kmウルトラマラソンのコースは、サロマンブルーに輝くサロマ湖畔を走ります。北海道の雄大な大地を、一面のジャガイモ畑の中を、郭公の鳴く原生林の間を駆け抜けてゆくのです。そして圧巻はサロマ湖とオホーツク海に挟まれたワッカ原生花園です。レース終盤の一番苦しいところではありますが、エゾスカシユリ、はまなすなど数多くの花たちがランナーを励ましてくれます。四万十川ウルトラマラソンは、最後の清流四万十川に沿って走ります。98年の大会では前夜通過した台風の影響で四万十川が増水し、名物の沈下橋がその名のとおりに沈下してしまったためにコースが一部変更になるというハプニングもありました。秋田内陸100kmマラソンは黄金色に輝くあきたこまちの水田の間を、遠くに秋田杉の美林や紅葉に染まり始めた山々を眺めながら走ります。ゴールの鷹巣では名物の大太鼓が迎えてくれます。阿蘇の100kmマラソンは、雄大な阿蘇のカルデラの外輪山をぐるっと一周近く走ります。素晴らしい景色ですが標高差800mの過酷なコースでもあります。ただゴール地点は内牧温泉でゴールしてすぐに温泉に入れるのがうれしいところです。さらに過酷なのが八ヶ岳野辺山高原100kmウルトラマラソンです。標高差は1000m以上あり最高所が1900m、最低所が900m弱という高原というか山岳コースを走るものです。レタスなどの高原野菜の畑の間を走り、遠

くには富士山や南アルプスが見え、八ヶ岳が間近にせまるという眺めはなかなかのものです。山岳マラソンといえばやはり富士登山競争です。富士吉田市役所前からスタートして、富士山の頂上まで一気に駆け登ります。やはり日本一高いところからの眺めは格別です。

マラソン大会で各地に行くことにより、その土地の名物を味わえるのもまたいいものです。サロマ湖では、帆立貝やタラバガニなどを腹いっぱい食べさせてもらえます。四万十川の鮎もおいしいし、阿蘇では給水所でスイカを食べさせてくれ、秋田では参加賞にあきたこまちを、八ヶ岳では参加賞に高原野菜をくれます。

マラソン大会に参加して強く感じるのは地元の人たちの熱意です。町おこし、地域活性化を目指して開催されている大会も多いと思います。サロマ湖100kmウルトラマラソンでは、コースとなる湧別町、佐呂間町、常呂町の多くの人たちがボランティアとして大会を支え盛り上げてくれます。地元にある三つの高校の生徒のほぼ全員が給水所やゴール後のマッサージなどでランナーに親切にしてくれます。四万十川ウルトラマラソンでは、中村市、十和村、西土佐村の山間部の人口の少ないところを走りますが、数多くの給水所があって地元の人たちがランナーを励ましてくれます。地元の人たちの熱烈な応援のおかげでどれほど勇気付けられ、力をいただいたことでしょう。

かつての日本では、農作業などの共同作業を通じて地域社会、共同体の絆が強められていたのだと思います。現在ではそれが薄れつつあるのでしょうが、マラソン大会のようなイベントが地域社会、共同体の絆を強める装置としての働きもしているように感じられます。さらに100kmのような長距離の大会はひとつの市町村だけで開催するのは不可能であり、いくつかの市町村が連携し、協力していく必要があります。それはこれからの地域社会のあり方のひとつの方向性を示すものかもしれません。またマラソン大会などでは日本全国から人が集まってきますから、全国の人と交流するチャンスともなります。それがいろいろな地方の人が異文化を理解し合う場となったりするのかもしれません。

私は大阪に来てから20年近くになりますが、その間故郷の鳥取との間を何度も行き来しました。学生のころは山陰線の夜行の鈍行や津山経由の急行をよく使いましたが、両方とも今はありません。特急まつかぜもなくなりました。平成６年12月に智頭急行が開業し、特急スーパーはくとができてからは、それまで５時間弱かかっていたのが一気に３時間10分で帰れるようになりました。これほど劇的に時間距離が短縮されると心理的にも近く感じて田舎に帰る回数が増えました。両親が年老いてきて農作業を手伝うべき機会が多くなったという事情もありますが。そしていつかは田舎に帰って農業（二十世紀梨・米）を継ぐつもりです。農業を取り巻く環境は厳しく、後継者不足でやめていく家も多いのですが、何とか生き残りの道を探っていきたいと思います。21世紀に日本の農村がどんな風に変わっていくのか、当事者の一人として見守っていくことになるものと思います。

これから先本格的な地理学の研究に携わることはないでしょうが、日々の生活の中で、仕事の中で、趣味のマラソンや山登りの中で、あるいは旅行の中で地理的なことに関心を持って、まだ郷土の歴史地理を調べたりといった形で、地理的なこころを持って生きていきたいものだと思います。

（昭和61年卒業）